附編１

下津井 釜島採集の遺物

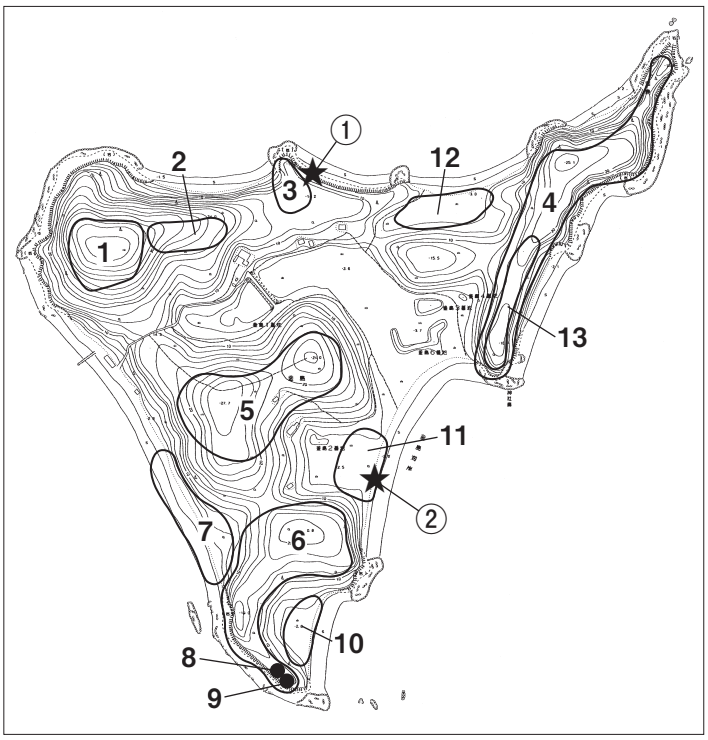
岡 嶋 隆 司

１　はじめに

ここに報告する資料は、2013年7月13日と2018年4月23日の踏査時に表面採集したものである。釜島の資料は、これまでに幾つかの紹介がおこなわれているが[1]、採集した資料は新しい知見と考えられることから、ここに紹介することとした次第である。なお、踏査には筆者の他に竹内信三氏と濱本敏広氏の同行を得た。

２　採集地点

釜島は、名勝地と後期旧石器時代の遺跡で著名な鷲羽山の沖に所在し、現在では無人島となっている。同島では、現在10箇所の散布地・包含層と2基の古墳・1つの古墳群が確認されており[2]、この中の釜島第1遺跡では、倉敷埋蔵文化財センターによる確認を目的とした発掘調査が行われている[3]。これまでに同島では、後期旧石器時代・縄文時代の石器類と古墳時代の須恵器・製塩土器、中世の亀山焼が確認されている（第1図）。今回報告する資料は、釜島東の浜遺跡と釜島第3遺跡の北側砂浜で採集されたもので、共に砂浜に位置する（第1図★印）。また、釜島では同地点以外の砂浜でも、踏査時にサヌカイト片・須恵器片・製塩土器片の散布と遺物包含層を確認している。



1 釜島第１遺跡　2 釜島第２遺跡　3 釜島第３遺跡
4 釜島第４遺跡　5 釜島第５遺跡　6 釜島第６遺跡
7 釜島西の浜遺跡　8 釜島南１号墳　9 釜島南２号墳
10 釜島南の浜遺跡　11 釜島東の浜遺跡
12 釜島北の浜遺跡　13 釜島東古墳群

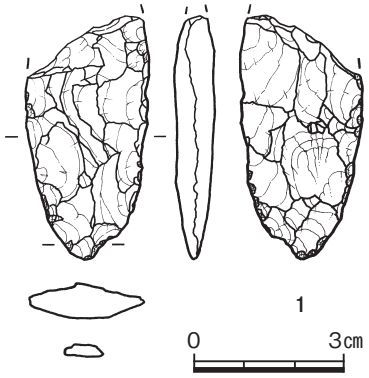
第１図　釜島の遺跡（S＝1／10,000）

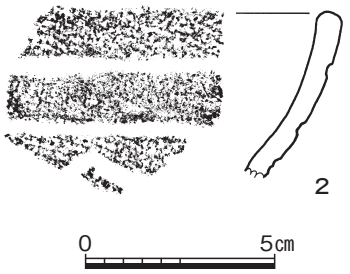
３　採集遺物

尖頭器（第2図1）　釜島第3遺跡北側の砂浜（第1図★印①）で2013年7月13日に表面採集した安山岩製の木葉形尖頭器基部である。上部を折断により失っているが、現存で長さ47.0㎜、全幅23.7㎜、最大厚7.3㎜、重量8.68gを測る。海浜部採集資料であることから全体的に波によるローリングを受けており、風化面は確認できず、素材の形状を復元することも困難である。直接打撃により調整されており、側辺には細かく剥離が施されている。形態などから本資料の帰属時期は、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期と考えられる。

縄文土器（第2図2）　釜島東の浜遺跡（第1図★印②）にて2018年4月23日に竹内信三氏により表面採集された浅鉢形土器の口縁部片である。全体的に波により軽くローリングを受けている。口縁端

部を丸く仕上げて、胴部に比べ僅かに肥厚させている。外面には、2本の沈線を平行に施文してあり、その下には屈折した沈線を施文している。下段の沈線と屈折沈線間には磨消縄文らしき痕跡が認められる。また、上段の沈線と口縁部間にも同様な痕跡が僅かに認められ、2本の平行沈線間では、土器片右端部において極僅かに確認することが出来る。内面は外面と同様、波によるローリングを受けている為、調整は不明である。胎土中に石英を多く含み、カリ長石・斜長石・流紋岩・石墨片石を含んでおり、流紋岩地域の粘土を用いている[4]。全て1㎜以下のものである。以上の特徴から年代は、縄文時代後期、中津式土器と考えられる。





第２図　遺物実測図
（尖頭器：Ｓ=2/3　縄文土器：Ｓ=1/2）

４　おわりに

釜島では、これまでに旧石器・縄文時代の石器・古墳・古墳時代の土器類等の資料が知られており、幾つかの資料報告はおこなわれているが､全体的な実態は必ずしも把握できているものとは言えない。今回、僅か一片ずつの土器片と石器ではあるが、釜島における人類活動の空白期を埋める資料となるものと考え報告をおこなったものである。

今回の報告を行うにあたり、土器片については、採集者の竹内信三氏から心よく快諾を頂き、能美洋介氏・扇崎 由氏・田嶋正憲氏からは有意義なご教示を頂いた。また、菅 紀浩氏には実測の労と石器についての計測と一部執筆を賜った。以上の方々に記してお礼申し上げます。

註

（1）間壁忠彦「第二章 旧石器時代」『新修倉敷市史 第一巻考古』倉敷市史研究会 1996
　　藤原好二「山本慶一氏寄贈の資料Ⅱ」『倉敷埋蔵文化財センター年報8』倉敷埋蔵文化財センター 2002
（2）倉敷市教育委員会『倉敷市遺跡地図 児島地区』2001
　　岡山県教育委員会『改訂岡山県遺跡地図 第5分冊倉敷地区』岡山県古代吉備文化財センター 2003
（3）藤原好二「釜島西丘上遺跡確認調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報8』倉敷埋蔵文化財センター 2002
（4）岡山理科大学教授 能美洋介氏のご教示による。